学習者の「読みの構え」を育成する国語科授業
－小熊英二と内山節を読む－

井上　泰

本稿では，国語科授業において，複数のテキストを読んで学習者にテキストの開く問題領域(テキストの問いかけ)とテキストの見方・考え方(テキストの呼びかけ)とを区別しながら読む「読みの構え」を身につけさせるための読みの方法の実践報告をする。

１．はじめに

複数のテキストを読んで，学習者にテキストの開く問題領域(問いかけ)と見方・考え方(呼びかけ)とを区別しながら読む「読みの構え」を身につけさせるには，二つの方法がある[*1]。

一つはテキストの問いかけは共通するが呼びかけは異なるテキストを複数読み，各テキストと対話していくことで学習者が問いかけへの思索を深めていく方法。

もう一つは，一つの作品や作家，筆者の著作を複数読み，テキストの問いかけや呼びかけを理解してテキストと対話していく方法である。

前者は，テキストの開く問題領域が学習者のなかで問題としてあり，学習者のものの見方・考え方を相対化したり新しい視点を与えたりする場合に有効である。

後者は，テキストの問いかけそのものが学習者のなかで問題化されていない場合や学習者と共有化が難しい場合，また呼びかけ自体がいくつかの議論を踏まえていて難解な場合に有効である。

つまり，どちらの方法をとるかは，①テキストの開く問題領域が学習者に共有されやすいものか，②テキストの見方・考え方が難解であるか，によって決まる。

本稿では，後者の方法について 2011 年度 5 年生に対して行った「現代文」の授業を報告したい[*2]。

２．単元のねらい

本単元は，本校使用教科書『新精選現代文』に評論（１）の単元として小熊英二「グローバリゼーションの光と影」と内山節「時間をめぐる衝突」が採録されていることをきっかけに構想したものである。両テキストともに，〈現代社会〉の問題について論じており，両テキストと対話することでこれまで〈自己〉や〈他者〉について考えてきた学習者の視野をさらに広げていくきっかけになると考えた。ただ，学習者のなかでテキストの開く問題領域が問題化されていないことやどちらのテキストもテキストの呼びかけを理解するための知識が必要で理解が難しいと考えた。

そこでそれぞれの筆者が書いたテキストを複数読むことで，テキストの問いかけとテキストの呼びかけを理解していくこととした。

３．教材について①

本単元で扱ったテキストの内容とテキストの開く問題領域を以下に示す。ここでは小熊英二の書いたテキストについて述べる。

①「神話からの脱却」[*3]

内容：筆者は，国民国家が所有している民族の歴史，神話の性質を述べた上で，異なる者を無化してしまう神話への逃避を批判して，異なる者と一人ひとり向かい合うという共存のあり方を説いている。

問題領域：グローバリゼーション，ナショナリズム，異文化理解，国民国家，民族，歴史

②「グローバリゼーションの光と影」[*4]

内容：筆者は，グローバリゼーションとナショナリズムは対立関係ではなく実は共犯関係であると主張し，そうした関係を踏まえて国家という制度の使い方について現実的な議論をすることを訴えている。

問題領域：グローバリゼーション，ナショナリズム，社会システム，国家

③「近代日本のナショナリズムとグローバリゼーション」[*5] **内容：**筆者は，近代日本ナショナリズムがグローバリゼーションによってつくられたことを指摘し，また，現代社会の行詰りの原因が高度経済成長期につくられたシステムの限界であるにも関わらず，現代のグローバリゼーション下における社会不安から戦前を理想化したナショナリズムが支持されている現状を指摘し，こうした現状からの逃避が拡大し国政の段階まで達することを危惧している。

問題領域：グローバリゼーション，ナショナリズム，社会システム，国家

④「未来への鍵」[*6]

内容：筆者は，現代社会の問題はグローバリゼーション下の社会において高度経済成長期につくられた仕組みが不適合を起こしていることだと述べた上で，これからの日本社会を構想していくためには日本社会の構成員の合

意が必要だと訴えるとともに，思想や言論に関わる者の役割はその手助けをすることだと自身の社会的な役割についても述べている。

問題領域：グローバリゼーション，ナショナリズム，社会システム，国家，社会学者

配列のねらいは，①②③で〈民族の歴史〉や〈グローバリゼーション〉，〈ナショナリズム〉といったテキストの問いかけと呼びかけを理解し，④を読むことでなぜ小熊英二が〈民族の歴史〉や〈グローバリゼーション〉，〈ナショナリズム〉といった問題を論じているのかについて理解していくことにある。複数のテキストを読むことで，小熊英二が〈民族の歴史〉や〈グローバリゼーション〉，〈ナショナリズム〉についての人々の認識を問い直すことを通して，よりよい日本社会をつくるための現実的な議論を求めていることに気づかせたい。

なお，②「グローバリゼーションの光と影」は教育実習生が行った。その関係で，上記のような配列になったが，②③①④の順でテキストを提示した方がテキスト間のつながりがよく，学習者の思考の流れに即しているだろう。

４．学習者とテキストとの対話の実際―「神話からの脱却」

学習者と小熊英二「神話からの脱却」との対話を次に分析する。まずは，テキストの問いかけを〈異文化理解〉の問題として理解しているものを引用する。

○単一民族（神話）というのは文章にもあったように，その時代の状況に応じて簡単に変わってしまう全く根拠のないものだった。そして，その根拠のない神話を基にして，他の国との関わり方や，自国の指針を決めてしまっている。

　筆者が言いたいのは，そんな根拠もなく，都合よく作られた神話を基に他者と向き合うのはよくないということではないだろうか。都合よく変えられる神話は，決して他者に都合が良いのではなく，完全に自分の事しか考えていない。そんな自分本位な姿勢で他者と向き合っても上手くいかないということだと思った。

傍線部にみられるように，本学習者はテキストの問いかけを〈異文化理解〉の問題としてとらえることができている。しかし，多くの学習者にとって〈異文化理解〉の問題としてテキストと対話することは難しいようであった。学習者にとって「神話」や〈異文化理解〉は身近な問題ではなかったようだ。

○筆者の理論は理解できるが，実際のところ，神話にたよって現実逃避している人はそんなにいないし，さして問題でないように思える。そんなに危機感をもたなくてもよいのではないだろうか…？

また〈異文化理解〉の問題を友人関係などの身近な他者理解の問題として解釈している意見もみられた。

○他者を自分の勝手なイメージで類型化してしまうというのは，〈日本人〉とか〈外国人〉といった大きな枠組みのものにも言えて，この方がより重大な問題になりうるかもしれない。けれど，正直あまり身近じゃないし，今の私の日常生活において，たとえ「アメリカ人は毎日ハンバーガーしか食べていない」と思っていて，それが違っていても困ることはない。むしろ，友人とか親しい人の間での類型化の方が身近だ。

このようにテキストの開く問題領域が学習者の身近な問題ではなかったということが対話を阻む大きな原因であろう。もちろん友人関係においてもテキストの呼びかけはあてはまるし，学習者にとって切実な問題であろう。しかし，身近な他者問題として本テキストの問いかけや呼びかけを理解したのでは，テキストの問いかけを矮小化しかねないし，学習者の視野も広がらない。

また，次に引用するように「神話」を肯定する意見もみられ，筆者が問題としていることや問題とする理由を考えられない学習者もいた。

○筆者の言う「神話」は「概念」にとても似ていると思った。背景や動機から，そういった像を人々はつくりだしてきたが，私はそれが別に悪いことだとは思えない。むしろ自分自身を類型化することや他者と自分たちを比較することで，仲間意識や愛国心が生まれたり…と良い面が多いと思う。

　もしも，世界の類型化をやめてしまえば，「私」の思う「わたし」は消えてしまうと思う。神話を通して他者と向き合うことは必要だと思うし，ましてや神話を完全になくすなんて無理なはなしだ。

こうした対話のあり方を問題とし，小熊英二の書いたテキストを重ねて読ませていった。

５．学習のまとめ①

ここでは学習者に「小熊英二の書いたテキストを複数読んで」として書かせたまとめの文章を分析したい。多くの学習者が小熊英二の問題としていることや見方・考え方を理解でき，さらには筆者の文章を書くねらいや思いといったテキストの背景にあるものに気づくことができていた。その中でも，よく書けているものを引用する。

○この筆者が問題提起している（読者に対して警告し，改善するよう促している）のは，「現実の捉え方」である。「グローバリゼーション」にせよ「他者との

関わり」にせよ，それぞれのテーマを捉える時に我々がつい陥ってしまう誤った認識を正し，物事を正しい構図で把握するよう訴えている。具体的に言うならば，「グローバリゼーション VS ナショナリズム」とか「イタリア人は楽天家だ」などの安易な，考えやすい図式を当てはめて納得しないように訴えていると言える。何らかのテーマについて考える時に，「こんな安直ではないだろう」と慎重に考えているつもりでも，実は大前提の段階で前の例のような安易な図式を使っての中で考えていることはありがちではないか。

しかし，筆者が本当に訴えたいのは「正しく物事を捉えよう」ということではない。その認識，把握の段階を超えて「日本のあり方」「日本の将来」に関わる諸問題を議論し，解決していくことを望み，訴えているようだ。ではなぜその前の段階についての問題提起が多く見られるのか。

それは「グローバリゼーションの光と影」の最後に述べられていたように，「状況を把握することなしには，現実的な議論は進まない」ことを筆者が強く思っているからだろう。「グローバリゼーション」など筆者の文章の特徴として，現代社会の状況と「一般的な理解」とは異なる形で説明，まとめてから策を示す，という大きな構造がある。（もっとも多くの評論文に共通することかもしれないが。）筆者にとって，正しい認識を踏まえて議論することが大切なのだ。裏を返せば，筆者に言わせると我々「世間一般」の諸問題への現状認識は間違いだらけあるいは不十分だということでもある。

筆者は２点の問題意識を持っている。一つは，「未来への鍵」などに強く表れた現代社会への問題意識。もう一つはその社会に対する人々の認識の不十分さ。誰もが筆者のように深く物事を考えられるわけではない。ただ社会に対する問題意識があるのならば，思考をどこかで止めず，考え続けることはせめて必要だろう。

傍線部にみられるように，小熊英二が問題としていることやそれについての見方・考え方，そして彼が何をねらってどういった思いで文章を書いているのかを，テキストの問いかけと呼びかけを重ねて読むことで気づき，理解できたようである。

次に，複数のテキストを読むことの効果が，文章中に明確に確認できるものを二つ引用する。

○筆者の主張していること，言おうとしていうことは大いに理解できる。しかし，それは単なる「理想論」のように思えてならない。確かに，筆者の主張しているような事が起きたり，そのような状態になることがあればこの上ないと思うが，「現実的」に筆者の主張は認められにくいと思う。現状を変えることは，とても困難であるということは言うまでもないだろう。きっと，そんな事は筆者は百も承知だろう。でもそれなのに，なぜ，筆者は机上の空論とも言われかねないような事を主張するのだろうか。この前の班別の話し合いでも，「神話はそもそもない」とか「議論する必要があるのか」などという意見がでたと思うが，そんな事を言われても筆者の主張したいこととは，何なのだろうか。

きっと私には，筆者の意図していることを百パーセント理解することはできないけど，私は，筆者は歴史社会学者として，文章で著すことで現況を変えてやろう！とか思っているのではなく，読み手の事象に対する思考を促し，考えを確かなものにさせるのを手伝おうとしているのではないかと思う。そして読み手の思考が確固たるものになるということは，間接的に未来を創ることを手伝っていると言えないだろうか。未来はこれから創っていけるものだから，より思想や理想を反映できると思う。筆者は「未来」に焦点をあてているのだ。そしてまた，筆者は自分の主張を反映させた「未来」について読み手に考えてもらいたかったのかなと思う。そういう姿勢で小熊さんのテキストを読むと前とは全く違うことを感じられた。

○今まで読んできたどの文章の中でも，筆者は現代社会の在り方を考え，今日の社会のシステムや人々の思想を批判している。そして，筆者が現代社会を批判する理由として，人々の先入観と現実とのギャップがあると私は考える。それが一番顕著に書かれているのが，「単一民族神話の起源」だ。文章中で筆者は私たち日本人が皆信じている「日本は太古からの単一民族国家である」という論に疑問をなげかけている。私も，日本の単一民族国家論を信じていた一人だが，言われてみると確かに違和感を感じた。江戸時代の「○○国（例えば尾張の国とか）」という呼び方は，単に現代の「○○県」を言いかえたものだと思っていたが，もしかしたら当時はそれぞれが外国同士の関係に近いものだったのではないか。だとしたら現代の人々の概念（先入観）は誤っていることになる。そして，現代の私たちの日本単一民族国家論を前提とした日本についての議論は，意味のないものになってしまう。（ママ）そうか！！筆者はこれをねらって数々の文章を書いているのではないだろうか。グローバリゼーションの光と影にしても，単一民族国家論の起源にしても，筆者はある議論について何か新しい論を提示しているのではなく，その

議論そのもののあり方について前提を見つめなおしている。グローバリゼーションやナショナリズムというと,私たちはそれぞれの長所短所に目がいくし,ほとんどの議論がそれについてだと思われるが,グローバリゼーションとナショナリズムの関係性について考えることで,相乗効果的にそれぞれの良い所を生かせるような意見が出るかもしれない。今回その議論を授業で行うことで,私たちは小熊氏のメッセージをうけとることができたのではないかと考える。

それぞれの傍線部に確認できるように,テキストを重ねて読むことで,筆者の文章を書くねらいや思いといったテキストの背景まで理解したり,発見したりすることができる。

６．教材について②

ここでは内山節の書いたテキストの内容とテキストの開く問題領域について述べる。

①「時間をめぐる衝突」[*7]

内容：筆者は,自身が暮らしている上野村の時間のあり方と資本主義を中心とした都市の時間のあり方とを比較しながら都市の時間の問題点を述べ,現代社会においてはグローバル化と称して都市の時間が拡大し,各地で自然に支えられた無事な世界が失われているとして,自然と人間とが無事に存在していける世界の創造を訴えている。

問題領域：グローバリゼーション,資本主義,自然,社会システム

②「反グローバリズム」[*8]

内容：筆者は,経済活動を中心とした資本主義がグローバルに広まっていく現状を指摘した上で,社会主義が失敗した理由を世界を共通化しながら生産力を増加させていったことに求め,現代では資本主義でも社会主義でもない,ローカルな世界を創造することでこれまでとは違う豊かさや生き方を模索する動きがあると述べている。

問題領域：グローバリゼーション,資本主義,社会主義,ローカル

③「小さな世界」[*9]

内容：筆者は,現代世界においてはその地域の自然や歴史,風土といったものを基盤とするローカルな世界が求められていると述べ,そうした動きを肯定している。

問題領域：グローバリゼーション,資本主義,社会主義,ローカル,自然,歴史,風土

教材配列のねらいは,①「時間をめぐる衝突」で述べられている「無事な世界」の創造を②「反グローバリズム」と③「小さな世界」を読むことで「ローカルな世界」として具体的に理解していくというもの。筆者は,自然に支えられた村の時間と資本主義の都市の時間とを二項対立で象徴的に描き出すことで都市の時間を問題があるものとし,その地域の自然や歴史,風土といったものを基盤とするローカルな世界の中で生き方や価値観を模索しようと訴えている。一見すると現代社会が抱える問題点があぶりだされているように見えるが,筆者の言う「無事な世界」は曖昧で村の時間や都市の時間などにも疑問が残る。また現代世界のあり方についても都市の時間対村の時間ときれいに二分して捉えすぎている。こうした叙述から,筆者が〈自然〉や〈歴史〉,〈風土〉といった観念を無批判に主体化し,その地点から〈現代社会〉を語っていることがわかる。おそらくそういった観念が彼のアイデンティティの拠り所になっているのだろう。学習者にはこうした筆者の〈現代社会〉観や〈現代社会〉を論じる態度に気づかせた上でテキストを評価させたいと考えた。

７．学習者とテキストとの対話の実際―「時間をめぐる衝突」

「時間をめぐる衝突」は実習生が授業を構想し行ったので学習者に意見文は書かせず,発表形式でテキストへの評価をおこなった。それらの授業で発表された意見を記すと,賛成意見もあったが,多くは「都市の時間」や「村の時間」の中身についての疑問や現代社会を都市と村との二項対立で捉えることへの批判がなされた。また筆者が言う「無事な世界」の内実がよくわからないという意見も多かった。

授業ではこうした疑問点を解消するために筆者の書いた他のテキストを読むというかたちで展開させていった。

８．学習のまとめ②

ここでは学習者に「内山節の書いたテキストを複数読んで」として書かせたまとめの文章を分析したい。学習者の意見として多かったのは「ローカルな世界」について批判的な意見や疑問を挙げる意見であった。

○私は筆者のローカルな世界の構築―その地域の文化や歴史,風土を基盤とした世界の構築は良い世界ではないと思うのです。そしてそれ以前にローカルな世界は成りえないと思います。

文化や歴史,風土を基盤とした世界。ならば特に何も文化をもたない地域やすたれてしまった歴史,伝統を持つ地域はどうすればよいのでしょう。風土だって現代においてどれだけの自然が残っているのでしょう。一部の地域では例えば筆者の言っていた

山村などはローカルな世界を構築できるかもしれませんが,大部分の地域では困ってしまうと思います。

○筆者が主張するローカルな世界の創造は現実的でない。その地域の自然，歴史，風土に人間が関わり模索するとあるが，自分の地域の自然を守るために，他の地域の木を切ったら意味がない。たとえ自然を守ろうとしても外部からの圧力がある場合もある。繰り返してはいけない歴史があるなかで，安易に過去を振り返るのはよくないと思うし，そもそも歴史は真実ではないみたいな議論は昔した。特有の風土に目を向けたとして，例えば福島にはどう手をつけるのか？放射能汚染という特別な環境から福島の人達は一刻も早く逃れたいだろうけど，福島をローカルな世界の一つとしたら解決できなくなるのでは？福島で地産地消とか言うのは難しい。

ローカルな世界ができたらなくなる問題もあるだろうけど，多分それって解決できたわけではないんだと思う。問題の規模が小さくなったような気がして，提起されないだけではないだろうか。きっとどこかの誰かは苦しんでると思う。

①「時間の衝突」で述べられていた「無事な世界」を「ローカルな世界」として具体的に考えていくことで学習者はテキストの呼びかけを具体的に吟味できている。また内山節の〈現代社会〉観や論じる態度についても言及できているものも見られた。

○内山さんは現代社会における時間の使われ方などを批判し，都市という枠組みから離れて田舎でのローカルな地域を提唱していた。だが，結局彼の意見は現代社会で生きる人々の「隣の芝生は青い」というものに過ぎないのではないか。確かに，競争社会の中に生きる我々の中には時間におわれて，またグローバリゼーションによって加速する競争に疲弊しきっている人もいるかもしれない。そういう人には時に命じられるままにゆったりとした生活が輝いて見えるだろう。しかしそれは田舎に対する一面的な見方でしかない。競争のない社会は概して生産性が低いなどの資本主義下にはあたり前である事がローカルな世界ではできない事があるように欠点もある。我々がより良い〈現代社会〉や〈世界〉を構築する為には一面的な見方による現実逃避ではなく，様々な意見の長所，短所に目を向けなければならない。そしてその利点を天秤にかけた上で，どれが最も良いのか決断するという事が求められていると思う。

○内山節はその地域の歴史，文化，風土を守ることでローカルな世界をつくることがよい,と論じていた。私は歴史，文化，風土を守ることはいいと思うが，例えば制度などをずっと守っていれば，いずれ制度が成り立たなくなるのではないか，と思う。世界の様子は日々変わっており，それはローカルな地域でも例外ではないと思う。そうすればずっと同じ制度を使っていても状況が変化すればうまく生活ができなくなるのは当然だと思う。成功した制度だからずっとそのままでいい，という考えがあって，今のシステムは大幅に変更されないのではないか。筆者の意見はどちらかといえば〝守る〟ほうに近いけれど，今現在システムが設定している状況は違ってひずみが生じているため，守ってばかりはいられないと思う。

「現実逃避」という言葉や「現在システム」の「ひずみ」を問題とする見方は小熊英二の学習において獲得したものであろう。ここでは小熊英二の見方・考え方を用いて内山節の書いたテキストを批判する学習者を確認することができる[*10]。

以上のように，テキストの呼びかけや筆者の態度の問題点を発見することも複数のテキストを読み理解することで可能となる。

９．おわりに

みてきたように，一人の筆者のテキストを複数読むことでテキストの問いかけや呼びかけが理解でき，またテキストの背景にある文章のねらいや筆者の思いや態度までも学習者は発見したり,理解したりすることができる。テキストの問いかけや呼びかけが学習者にとって負担になる場合に，テキストを読み進めていく一つの効果的な方法であろう。

最後に「小熊英二と内山節の書いたテキストを読んで」として学習者に書かせた文章を一つ紹介したい。

○二人ともキーワードは「グローバル」。キーワードは同じなのに，論じていることは正反対であると思う。小熊さんが批判している「現実からの逃避」が内山さんの「ローカルな世界をつくること」だと私は思う。

私的には，小熊さんの意見のほうが現実的というか，今の社会に必要な考えではないかと思う。

本単元では〈現代社会〉という学習者にとって考えにくい問題領域をテーマとしたが，各テキストの問いかけや呼びかけ，またはテキストの背景にあるものをしっかりと理解させることで，他の筆者の書いたテキストとの比較が可能となり，問題領域への思索をさらに深めさせることができるだろう。

【注】

*1　本稿を執筆するにあたり，複数教材を用いた単元構

想についての考察の先行例として，石井希代子「複数教材を用いた単元構想についての考察」(129 ～ 134 頁,『研究紀要』第 50 巻，広島大学附属福山中・高等学校，2010 年 3 月)を参照させていただいた。また,「読みの構え」の育成についての考察は，拙稿「国語科授業における学習者の読みの構えの育成」(135 ～ 140 頁,『研究紀要』第 50 巻，広島大学附属福山中・高等学校，2010 年 3 月)で報告した。

*2　前者の実践例は，拙稿「学習者の『読みの構え』を育成する国語科授業―〈死〉について考える―」(195 ～ 200 頁,『研究紀要』第 51 巻，広島大学附属福山中・高等学校，2011 年 3 月)で報告した。

*3　「神話からの脱却」(400 ～ 404 頁。『単一民族神話の起源―〈日本人〉の自画像の系譜』, 新曜社, 1995)。授業では,「神話」の具体を理解させることに時間を割いた。「神話」がよく解らない学習者や現代における「神話」はないという学習者もいたが，震災後に国内外のメディアで語られた日本人賛美は単一民族神話に依拠したものであり，授業ではそうした内容の新聞のコラムを紹介し，現代における単一民族神話を確認した。

*4　「グローバリゼーションの光と影」(32 ～ 37 頁。『新精選現代文』, 明治書院，2009)。授業では,「グローバリゼーション」と「ナショナリズム」の概念を問い直すとともに,「国家という制度」(37 頁)という文言を取り上げて筆者の〈国家〉観について考える時間を設けた。国家は自明のものではなく人々がよりよく社会で暮らすためにつくられたものであるという〈国家〉観をここから読み取ることができる。なお学習者の意見文にもあったのだが，本文の内容と題名とが合致しない印象がある。そこで題名について毎日新聞社についてメールで問い合わせたところ以下のような返答があった。

> 『グローバリゼーションの光と影』の題名は，毎日新聞社が命名した紙面企画で，2002 年 1 月 21 日から 2003 年 2 月 24 日まで通しての大題名になります。この企画は４部構成になっております。各部の副題として，
> 「第１部・国家のゆくえ」①～⑩回
> 「第２部・変わる企業社会」①～⑩回
> 「第３部・人間の世紀へ」①～⑩回
> 「第４部・アメリカという存在」①～⑪回
> という構成です。(副題の命名も毎日新聞社です)。小熊英二さんに寄稿いただいた分は,『グローバリゼーションの光と影』の「第１部・国家のゆくえ」⑥（＝第１部の６回目）になります。
> なお，小熊英二さんの回の見出しは，毎日新聞社の企画担当の編集者が文中から取り出して「図式はナショナリズムとの共犯関係」と付けています。

メールによれば，題名は企画名だという。そして小熊英二の文章は「国家のゆくえ」について論じたものだという。つまり，小熊英二は「国家のゆくえ」を考えるために〈グローバリゼーション〉と〈ナショナリズム〉について論じているのである。この副題等の情報は指導書には書かれていないものである。しかし，この点を踏まえれば，本テキストの読み方も大きく変わってくるだろう。

*5　「近代日本のナショナリズムとグローバリゼーション」(58 ～ 69 頁。慶応義塾大学 SFC フォーラム事務局,『産学の対話 2002　日本復権の構図』, 慶応義塾大学 SFC フォーラム，2002)

*6　「未来への鍵」(285 ～ 286 頁。『私たちはいまどこにいるのか』, 毎日新聞社，2011) 初出は「新しい国民的合意を作るべき時が来ている」(『文藝春秋』, 2011 年 4 月号)

*7　「グローバリゼーションの光と影」(36 頁。『新精選現代文』, 明治書院，2009)

*8　内山節『「里」という思想』(43 ～ 46 頁。新潮社, 2005)

*9　内山節『「里」という思想』(100 ～ 102 頁。新潮社，2005)

*10　小熊英二の「ある観念に人々がアイデンティティを求め，現実から逃避する」という視点は 2012 年現在においても有効であろう。例えば，中野剛志は『ＴＰＰ亡国論』(集英社，2011) のなかで次のように述べている。

> 私は，ＴＰＰへの参加に賛成する議論を追っているうちに，ある共通する特徴に気づきました。それは，どの議論も，戦略的に考えようとするのを自分から抑止しているように見えるという点です。たとえるならば，戦略的に考えようとする思考回路に, サーキット・ブレーカーが付いていて, あるコードが出ると，それに反応してブレーカーが自動的に落ちて，思考回路を遮断してしまうような感じです。
>
> ＴＰＰをめぐる議論には，そういうブレーカーを働かせるコードが特に多いのです。いくつか例を挙げてみましょう。
>
> 「開国／鎖国」「自由貿易」「農業保護」「日本は遅れている／乗り遅れるな」「内向き」「アメリカ」「アジアの成長」「環太平洋」

グローバル社会において日本をどのように語るかといった問題は大きい。こうした問題を学習者に気づかせ考えさせていくことも〈現代社会〉について考える単元では重要である。